

平成25年度採択プログラム 中間評価調査 (中間評価後修正変更版)

博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表。ただし、項目13については非公表]

機関名	京都大学	整理番号	U04
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) やまぎわ じゅいち 氏名・職名 山極 壽一 (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) きたの まさお 氏名・職名 北野 正雄 (京都大学理事・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) まつざわ てつろう 氏名・職名 松沢 哲郎(京都大学高等研究院・特別教授)		
4. 類型	U <オンリーワン型>		
5.	プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	
	英語名称	Leading Graduate Program in Primatology and Wildlife Science	
	副題	人間とそれ以外の動物を対象とした地球社会の調和ある共存	
6. 授与する博士学位分野・名称	博士(理学)に「霊長類学・ワイルドライフサイエンスプログラム修了」を付記		
7. 主要分科	(①) (②) (③) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入 基礎生物学、生物科学、人間情報学、人類学、環境創成学、動物生命科学、心理学、子ども学、科学教育・教育工学、地域研究、文化人類学、文化財科学・博物館学、政治学		
	(① 進化生物学) (② 生態・環境) (③ 認知科学) ※ オンリーワン型は太枠に主要な細目を記入 生物物理学、動物生理・行動、植物分子・生理科学、自然人類学、自然共生システム、獣医学、統合動物科学、実験心理学、子ども学、科学教育、地域研究、文化人類学・民俗学、文化財科学・博物館学、政治学、国際関係論		
8. 主要細目			
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	理学研究科生物科学専攻、霊長類研究所、野生動物研究センター		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名	該当なし		
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名	該当なし		
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	該当なし		

14. プログラム担当者の構成 計 60 名					
外国人の人数		5 人	[8 %]	女性の人数 15 人 [25 %]	
プログラム実施大学に属する者の割合 [77 %]					
プログラム実施大学に属する者			46 人	プログラム実施大学以外に属する者 14 人	
そのうち、他大学等を経験したことのある者			32 人	そのうち、大学等以外に属する者 7 人	
15. プログラム担当者					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成29年度における役割)
(プログラム責任者) 北野 正雄	キタノ マサオ		理事(教育担当)、副学長	電磁波工学博士(工学)	プログラム責任者として学位プログラムの全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 松沢 哲郎	マツザワ テツロウ		高等研究院・特別教授	比較認知科学博士(理学)	プログラムコーディネーターとして学位プログラムの全体運営が円滑に進むよう、諸般の調整にあたる。
平井 啓久	ヒライ ヒロヒサ		霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	分子細胞遺伝学博士(医学)	霊長類学プログラム推進リーダーとして博士教育カリキュラムに必要な諸般の調整にあたる。
幸島 司郎	コウシマ シロウ		野生動物研究センター・センター長・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	生態学・動物行動学博士(理学)	ワイルドライフサイエンス・リーダーとして博士教育カリキュラムに必要な諸般の調整にあたる。
山極 壽一	ヤマギワ ジュイチ		学長	人類進化論博士(理学)	保全生物学リーダーとしての役割とともに、自然人類学、霊長類学で人と野生動物の両方の見地から保全研究や政策について国際的な視野から教育にあたる。
阿形 清和	アガタ キヨカズ		学習院大学大学院自然科学研究科生命科学専攻・教授 京都大学野生動物研究センター・特任教授	発生生物学博士(理学)	本プログラムにおける教養科目リーダーとしての調整の役割とともに、ゲノムレベルでの生物多様性教育・実習を担当する。
中川 尚史	ナカガワ ナオフミ		理学研究科・生物科学専攻・教授	霊長類学博士(理学)	プログラムの分担者のひとりとして、生態学、保全生物学分野の教育を担当する。
古市 剛史	フルイチ タケシ		霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学、自然人類学博士(理学)	プログラム担当者として、主として野外調査に基づく教育及び研究指導をおこなう。
湯本 貴和	ユモト タカカズ		霊長類研究所・所長・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	霊長類学・生態学博士(理学)	霊長類と森林に関する生態学的な観点から研究教育をおこなうとともに、生態系における動物の役割や人間社会との関係の探求からワイルドライフサイエンスの構築に寄与する。
岡本 宗裕	オカモト ムネヒロ		霊長類研究所・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	獣医学博士(獣医学)	プログラム担当者として、獣医学特に野生動物医学に関する教育を担当する。
Huffman, Michael Alan	ハフマン マイケル アラン		霊長類研究所・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	行動生態学博士(理学)	プログラム担当者として、霊長類の行動生態学に係る教育及び研究指導をおこなう。
Bercovitch, Fred Bruce	ベルコビッチ フレッド ブルース		野生動物研究センター・特任教授 (H29.4.1所属部局・職位変更)	比較野生動物生物学 Ph.D.	国際的な研究機関で勤務した経験をもとに、国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。ネイティブとして英語での研究・教育を支援する。
Hill, David Anthony	ヒル デイビット アンソニー		野生動物研究センター・特任教授	社会生態学 Ph.D.	国際社会で活躍できる研究者の育成を推進する。また過去に数度渡日した経験により、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献し、またネイティブの英語を活かす。
平田 聡	ヒラタ サトシ		野生動物研究センター・教授	比較認知科学博士(理学)	分担者としての役割として、熊本サンクチュアリでの比較認知科学の実習を担当する。
足立 幾磨	アダチ イクマ		霊長類研究所・准教授 (H29.4.1職位変更)	比較認知科学博士(文学)	国際共同先端研究センター所属教員として本プログラムとりまとめの役をするとともに、霊長類研究所での比較認知科学の実習を担当する。

15. プログラム担当者一覧(続き)

氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成29年度における役割)
橋本 千絵	ハシモト チエ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	霊長類学、自然人類学 博士(理学)	プログラム担当者として、主として野外調査にもとづく教育及び研究指導をおこなう。
江木 直子	エギ ナオコ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	古生物学、比較形態学 Ph.D(医学)	プログラム担当者として、霊長類学、古生物学の講義と実習を担当する。
宮部 貴子	ミヤベ タカコ		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	獣医学、麻酔学 Ph.D(獣医学)	プログラム担当者として、獣医学、麻酔学に関する教育を担当する。
林 美里	ハヤシ ミサト		霊長類研究所・助教 理学研究科・生物科学専攻・助教(協力講座)	比較認知発達 博士(理学)	本プログラムの担当者として、霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
MacIntosh, Andrew James Jonathan	マッキントッシュ アンド リュー ジェームズ ジョナサン		霊長類研究所・准教授 (H29.4.1所属部局・職位変更)	行動生態学 博士(理学)	本プログラムの担当者として、外国人でありながら京都大学で博士学位を取得した経験をもとに、日本人学生を考慮した学位プログラムの国際化に貢献する。
伊谷 原一	イダニ ゲンイチ		野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	人類学・動物園科学 博士(理学)	本プログラムの副コーディネーターとして調整の役にあたるとともに、ワイルドライフサイエンスの専門家として、国際的な発信力をもつ実践者の育成をおこなう。
村山 美穂	ムラヤマ ミホ		野生動物研究センター・教授 理学研究科・生物科学専攻・教授(協力講座)	動物遺伝学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、フィールドとラボをつなぐゲノム細胞研究・教育つうじて、野生動物の保全の実践において国際貢献できる人材を育成する。
中村 美知夫	ナカムラ ミチオ		理学研究科・准教授	人類学・霊長類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、アフリカで絶滅危惧種の長期研究やその保全をおこなってきた経験を活かして、フィールドワークを主体的に実施できる人材の育成をおこなう。
杉浦 秀樹	スギウラ ヒデキ		野生動物研究センター・准教授 理学研究科・生物科学専攻・准教授(協力講座)	動物行動学・生態学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、保全生物学の立場から、野外でのフィールドワークの指導をおこなう。
山越 言	ヤマコシ ゲン		アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ地域研究専攻・准教授	地域研究・文化人類学 博士(理学)	本プログラムの分担者として、ギニア共和国における長期的ワイルドライフサイエンス人材育成活動の実施にあたる。
清水 展	シミズ ヒロム		東南アジア研究所・名誉教授 (H29.4.1職位変更)	文化人類学、東南アジア研究 博士(社会学)	本プログラムの分担者として、東南アジアにおける、文化人類学フィールドワークの指導にあたる。
松林 公蔵	マツバヤシ コウゾウ		東南アジア研究所・連携教授	フィールド医学、老年医学、神経内科学 博士(医学)	本プログラムの分担者として、フィールド(ブータン・ニューギニア)における高齢者ヘルスケア・デザインの構築を担当する。
吉川 左紀子	ヨシカワ サキコ		こころの未来研究センター・教授	認知心理学・認知科学 博士(教育学)	本プログラムで育成される若手の指導者に必要不可欠な、心理学領域の教養知識にかかる情報提供や教育活動を担う。
明和 政子	ミョウワ マサコ		教育学研究科・教育学専攻・教授	発達科学・比較認知科学 博士(教育学)	本学位プログラムにおける人間科学における基礎教育の提供とフィールドでの応用実践。
坂本 龍太	サカモト リョウタ		東南アジア研究所・准教授	フィールド医学 博士(医学)	プログラム担当者としてブータン王国を対象とした指導者育成プログラムを担当する。
今井 啓雄	イマイ ヒロオ		霊長類研究所・准教授	ゲノム科学 博士(理学)	プログラム担当者としてゲノム科学とゲノム実習を担当する。
友永 雅己	トモナガ マサキ		霊長類研究所・教授	比較認知科学 博士(理学)	プログラム担当者として比較認知科学とチンパンジー認知実験実習を担当する。
森村 成樹	モリムラ ナルキ		野生動物研究センター・特定准教授	動物福祉学 博士(理学)	プログラム担当者として動物福祉学と環境エンリッチメント実習を担当する。
中村 美穂	ナカムラ ミホ		野生動物研究センター・客員准教授	動物映像学 理学士	プログラム担当者として動物映像学とその実習を担当する。

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成29年度における役割)
藤澤 道子	フジサワ ミチコ		東南アジア研究所・連携准教授	フィールド医学博士(医学)	プログラム担当者としてフィールド医学の立場からのアフリカおよびブータンでの実習を担当する。
岸田 拓士	キシダ タクシ		野生動物研究センター・特定助教	進化ゲノム科学博士(理学)	プログラム担当者として保全生物学のラボワークに関する教育に従事する。
服部 裕子	ハツトリ ユウコ		野生動物研究センター・特定助教	比較認知科学博士(文学)	プログラム担当者として霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
木下 こづえ	キノシタ コヅエ		野生動物研究センター・助教 (H29.4.1所属部局変更)	保全繁殖学・博士(農学)	プログラム担当者として、動物の繁殖学に関わる研究および教育活動を遂行する。
狩野 文浩	カノウ フミヒロ		野生動物研究センター・特定助教	比較認知科学・博士(理学)	プログラム担当者として、学生の実験計画、実験器具取扱い、データ採取、データ分析、論文執筆などについて協力する。
山梨 裕美	ヤマナシ ユミ		野生動物研究センター・特定助教	動物福祉・博士(理学)	プログラム担当者として、動物が心も体も健康に生活できるような環境整備のために活躍する人材の育成を担当する。
早川 卓志	ハヤカワ タカシ		霊長類研究所・特定助教	分子生態学、比較集団ゲノミクス博士(理学)	プログラム担当者として、保全遺伝学・分子生態学の基礎及び実践教育を担当するとともに、動物園・水族館・博物館との研究教育活動の連携や、試資料の収集・保存・管理に関する講義・実習をおこなう。
滝澤 玲子	タキザワ レイコ		野生動物研究センター・特定助教	環境行政修士(農学)	プログラム担当者として、環境省の自然系職員としての経歴を活かし、環境行政で活躍できる人材育成をおこなう。
阿部 秀明	アベ ヒデアキ		野生動物研究センター・特定助教	動物遺伝学博士(理学)	プログラム担当者としてフィールドとラボをつなぐゲノム細胞研究・教育をつうじて、野生動物の保全の実践において国際貢献できる人材を育成する。
大淵 希郷	オオブチ マサト		野生動物研究センター・特定助教	動物園科学・科学コミュニケーション修士(理学)	プログラム担当者として、動物園飼育展示係、科学コミュニケーター職の経験を活かし、科学的論理思考・対話力・発信力を持ったワイルドライフサイエンスの人材育成をおこなう。
川上 文人 (H29.4.1追加)	カワカミ フミト		野生動物研究センター・特定助教	比較認知発達科学博士(学術)	プログラム担当者として動物園における研究教育活動の連携を推進し、プログラムの高大連携プロジェクトの指導にあたる。
ANDERSON, James Russell (H29.4.1追加)	アンダーソン ジェームズ ラッセル		文学研究科行動文化学専攻・教授	比較心理学 Ph.D (Psychology)	プログラム担当者として、ネイティブ英語での研究・教育を支援し、幅広い視点を養う英語によるセミナーを実施する。
藤田 和生	フジタ カズオ		文学研究科・教授	比較認知科学博士(理学)	プログラム担当者として霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
板倉 昭二	イタクラ ショウジ		文学研究科・教授	発達認知科学博士(理学)	プログラム担当者として霊長類学、比較認知科学の講義と実習を担当する。
毛利 衛	モウリ マモル		日本科学未来館・館長 野生動物研究センター・特任教授	科学コミュニケーション博士(理学)	本プログラムの分担者として、科学教育(科学的な論理思考と科学コミュニケーション能力を持つ人材の育成)を担当する。
西田 睦	ニシダ ムツミ		琉球大学・理事(研究・企画戦略担当)、副学長 野生動物研究センター・特任教授	水域生物学・進化生物学 農学博士	本プログラム担当者として、主として水圏生物学、進化生物学・保全遺伝学の分野の面から、本プログラムの推進に参画する。
田中 正之	タナカ マサユキ		京都市動物園・生き物学び研究センター長(野生動物研究センター・特任教授)	比較認知科学・動物園学博士(理学)	本プログラム担当者として、野生動物保全における動物園の役割についての教育、および動物園を舞台にした実践者の育成を担当する。
岡安 直比	オカヤス ナオヒ		公益財団法人日本モンキーセンター国際保全事業部・部長/野生動物研究センター・特任教授 (H28.7.1所属・職位変更)	保全生物学、霊長類学を基礎とした森林生物多様性保全博士(理学)	国際NGO職員としての経験を生かし、霊長類学の基礎を踏まえた発展途上国における希少種保護の実践を、自然保護と地域社会の持続可能な発展の双方から捉え、指導する。

15. プログラム担当者一覧(続き)					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成29年度における役割)
星川 茂一	ホシカワ シゲカズ		前 京都市副市長 野生動物研究センター・特任教授	地方行政学 学士(法学)	本プログラム担当者として、自治体行政に携わった者の立場から当学位プログラムの内容充実に貢献する。
堀江 正彦	ホリエ マサヒコ		明治大学研究・知財戦略機構・特任教授、前 駐マレーシア特命全権大使・地球環境問題担当大使 野生動物研究センター・特任教授	地球環境問題 修士(経済学)	本プログラム担当者として、外務省での大使としての経験を活かし、学問を実践に活かす人材の育成を支援する。
山本 真也	ヤマモト シンヤ		神戸大学国際化学部・准教授 野生動物研究センター・特任准教授	比較認知科学 博士(理学)	プログラム担当者としてチンパンジー属2種の比較認知科学とその実習を担当する。
杉山 茂	スギヤマ シゲル		静岡大学工学部・准教授 野生動物研究センター・特任准教授	アメリカ思想史 Ph.D.	プログラム担当者として笹ヶ峰サバイバル実習を担当する。
青木 秀樹	アオキ ヒデキ		お茶の水総合法律事務所・弁護士 野生動物研究センター・特任教授	原子力行政論 学士(法学)	プログラム担当者として原子力行政論の講義を担当する。
松田 一希	マツダ イツキ		中部大学中部高等学術研究所・准教授/野生動物研究センター・特任准教授	霊長類生態学 博士(理学)	プログラム担当者としてボルネオ霊長類の生態とフィールド実習を担当する。
齋藤 亜矢	サイトウ アヤ		京都造形芸術大学文明哲学研究所・准教授/野生動物研究センター・特任准教授	比較認知科学・ 芸術論 博士(美術)	プログラム担当者として比較認知科学からみた芸術論の講義と実習を担当する。
大橋 岳	オオハシ ガク		中部大学人文学部・講師 野生動物研究センター・特任講師	霊長類学 修士(理学)	プログラム分担者として、野生動物の生態および保全について研究をおこない博物館や動物園・水族館などの連携を深める人材の育成にあたる。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

【概要】 霊長類学は日本発の、そして日本が世界を牽引する稀有な学問であり、近年、霊長類学を基盤にし、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野が確立されつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムを包括的に理解しつつ、「地球社会の調和ある共存」を目指す実践活動である。学問としては最先端を担っているが、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。①生物保全の専門家として国連や国際機関・国際NGO等で働く若手人材、②博物館・動物園・水族館等におけるキュレーター、および、生息地で展開する博物館動物園としての「フィールドミュージアム」構想の具現者、③長い歳月をかけて一国を対象としたアウトリーチ活動を担う実践者、である。これら日本が抱える3つの欠陥を逆に伸びしろと考える。研究・教育・実践の新たな展開の場と捉え、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの育成を目指す。本プログラムで修養を積んだ人材は、高度な専門的知識を有するとともに、現場でのニーズを素早く把握し、問題を解決する能力を有しており、産業界においても貴重な戦力として期待できる。

【特色および優位性】 本プログラムでは、霊長類学の蓄積を活かし、以下3点を重点施策に据え、ワイルドライフサイエンスの広い分野で博士学位を持ち国際性を身につけたグローバルリーダーを育成する。

1. 絶滅危惧種をシンボルとした生態系の保全を担う国際機関ならびに NGO 組織で職員や指導者として活躍できる人材の育成

日本は国際連合 (UN) の主要なドナー国でありながら、職員数は著しく少ない。これは専門性と、語学力・情報発信力、フィールドワークの現場経験をあわせもった人材が不足しているためだと考えられる。そこで、本プログラムを通じ、現場経験をもち博士学位を有するフィールドワーカーを育成し、国連を含む国際機関、国際的 NGO 等で中心となって働く人材を養成することが、国際社会の一員としての日本の急務と考える。幸い、霊長類学とワイルドライフサイエンスについて日本学術振興会の先端研究拠点事業等で日独米英仏伊の先進6か国連携体制を確立し、生息地の主要研究機関とも覚書を通じた連携体制を構築してきた。それらをもとに、研究者ではなく国際的実践者の人材育成を目指す。

2. 博物館・動物園・水族館・教育現場等において主事の役割を果たす指導者の育成

欧米ではリサーチフェローやキュレーター等の職が確立している、博士学位をもった人材が、研究と教育を両立させつつ動物園・水族館等の運営等に深く関わっている一方、日本では人間とそれ以外の動物との調和ある共存について学問と実践を統合する人材が乏しい。本プログラムにより、絶滅危惧種保護のための国際連携にも貢献できるような国際的情報発信とコミュニケーションを園館で担う主事の役割を果たす人材を育成する。本学はすでに京都市動物園をはじめ園館との連携締結を進めており、本プログラムで狙う人材教育の基盤はできつつある。法令によって定められた博物館の学芸員資格だけではなく、真に科学を学んだものが博物館での活動を通じて、科学的研究成果を一般に伝えることができるようにしたい。その先に、国内外の生息地そのもので展開する新しい博物館動物園のかたちである「フィールドミュージアム」の実現を目指す。

3. 一国を対象としたアウトリーチ活動を担えるオールラウンドな指導者の育成

京都大学は、1957年にはじまったブータンとの交流に見られるように、全学を挙げて1国を対象としたアウトリーチ活動をおこなってきた。こうした活動を支えるのは、総合大学ならではの文化・教育・宗教・防災・生物・農業・環境等に関する広範な協力体制である。京都大学はこの点においても秀でている。本プログラムでは、ゲノム科学から行動学や生態学までフィールドワークを基本とした手法で、アマゾン(ブラジル)等生物多様性のホットスポットにおける保全活動を通じて、一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動を担うオールラウンドな指導者の育成を目指す。活動実施予定の国や地域との連携体制は既に整っている。

上記の施策のため、以下の3点を軸に教育をおこなう。

- ① **フィールドワーク実習**: 京大が保有する国内の野外実習拠点を活用する。天然記念物の幸島での野生ニホンザルの生態観察、世界自然遺産の屋久島でのヤクザルとシカの共存する森でのゲノム実習、妙高高原京大ヒュッテを拠点とした野外生活・観察実習等に、自主企画運営の短期野外研究を加えた8つの野外実習を1-2年次の必修とする。3年次以降は、国内外連携拠点でフィールドワーク実習をおこなう。
- ② **国際連携機関との交流**: 各年次で義務付ける。平成16年度の先端研究拠点事業に始まって13年続く日独米英仏伊の先進6か国の連携に加えて、生息地国の主要研究機関との覚書も整っている。いずれかの場所を中継基地として、海外実習を実践する。
- ③ **国内実験施設での実習**: 京大が保有する研究施設: 霊長類研究所、野生動物研究センター、リサーチリソースステーション(RRS)、幸島観察所、熊本サンクチュアリや、学外連携施設: 京都市動物園、京都水族館、名古屋市東山動物園、日本モンキーセンター等を活用する。ラボワークを通して、こころ・からだ・くらし・ゲノムの広い視野から人間とそれ以外の動物の関係を学ぶ。

入学試験は、英語でおこない、春秋入学を認める。すでに平成21年度に霊長類研究所国際共同先端研究センターを立ち上げ、グローバル30プログラムに沿って外国人留学生を対象に独立の大学院入試・教育・学位授与をおこなってきた。そのノウハウと蓄積を日本人学生にも活かして、入り口から出口まで一貫した展望で国際性をもった運営をする。

学位プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、学位プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)

霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院(PWS)



1

絶滅危惧種保全の専門家として国連や国際機関・国際NGO等で働く若手人材
目に見える国際貢献: 専門性・語学力・フィールドワーク経験を持つ人材を輩出



2

博物館・動物園・水族館等のキュレーター(博士学芸員)
専門的知識・経験を発揮し、社会に貢献するキャリアパス



3

長い歳月をかけて一国を対象としたアウトリーチ活動を担う実践者
京都大学のフィールドワークの伝統と蓄積: 現地目線でニーズを発信、日本の具体的貢献を提言できるリーダー

同窓運営組織を作って相互交流・連携と次世代育成を図る

国際性を身につけた実践者の育成カリキュラム

プログラム運営委員
担当教員

外部評価委員会
国際連携機関

- ◆フィールドワーク実習
国内フィールドワーク実習
海外フィールドワーク実習
- ◆国際連携機関との交流
◆国内実験施設での研修
◆母語以外の言語(最低ひとつ)習得(必修)・その他の言語習得(強く推奨)
- ◆野外研究の基礎となる学問の習得

グローバル30プログラムでの実績がある英語での入試・教育・学位授与

- ◆理学研究科生物科学専攻の8月試験(4月入学)の通常入試
- ◆平成21年から実施済の春秋入学の国際入試: 外国籍の者だけ受験

海外フィールドワーク拠点と連携協定の締結先

アマゾン・コンゴ・ボルネオの世界3大熱帯林(大きな赤丸)に研究教育拠点をもち



フィールド実習のための国内拠点



1年次

2年次

3年次

4年次

5年次

野外研究の基礎となる学問の習得(概論・基礎論)

国内実験施設研修

母語以外の言語(最低ひとつ)習得(必修)・その他の言語習得(強く推奨)
(自学自習を支援・現地習得・指導教員による審査)

国内フィールドワーク実習(年次に応じ、フィールドワークにおける役割変化)

海外実習

海外フィールドワーク

海外フィールドワーク・研修

博士論文執筆

修了審査

所属研究科指導教員・プログラム指導教員から審査委員を選抜し、ディプロマポリシーに則り審査
→在籍研究科から授与される学位にプログラム修了が付記